

桜蔭俳話会 七月句会 (第三二七回)

平成二十五年七月二十八日(日)

会場・桜蔭会館

4点②手ぬきとは言はせぬ葉味冷奴

友子

①明日葉の苦み原発再稼動

明美

3点①ベランダの守宮まばたきしてゐたり

清子

①羅馬字の小さき表札日々草

秀一

石灼けて石みなほとけ遊女墓

守

捨て切れぬ夢の余韻や遠花火

守

2点①万緑の集落ひとの世の軋み

明美

足裏に馴染む板の間大暑かな

幸

大蟻のひとつせはしき厨かな

秀一

老う母のひと味うまき胡瓜もみ

友子

1点①奥座敷精進料理夏の山

直子

梅雨空に滑り転んだ野草園

直子

朝顔やとどころに我を待つ

邦子

今の雷届きしかと問ふ長電話

友子

バス停の会釈遅れしサングラス

ツル子

ざぶんざぶ音する路地や月涼し

ヤエ子

羅の秘めたる恋の根付かな

幸

炎帝の知るや大地の発火点

守

梅雨明の天地揺がぬ構へかな

秀一

蝉の声片付け事の急かされり

ヤエ子

解熱剤一粒欲しき炎暑かな

明美

海水着口いつぱいの塩むすび

ツル子

滴りのきらめき茶屋の寄せ豆腐

守

夕暮の海辺へ浴衣の子等急ぐ

友子

みづうみにいつまでも浮く蝉ひとつ

明美

畳屋の一日永し朝ぐもり

清子

ねぶの花母と手繋ぐ古写真

秀一

盆詣り並ぶ墓石に小猿かな

幸

中世の文学好み冷奴

清子

※

山開き薬王院や天狗焼

直子

教え子の届けて嬉し初西瓜

邦子

友よりの絵手紙かざり涼を呼び

邦子

高尾山ケーブルカーで涼しけり

直子

蚊とり番夜中に二度も起きて焚き	邦子
夾竹桃香に迎えられ送られて	邦子
疲れても祭りの日かな花火見ゆ	直子
寝苦しさ開き直りぬ団扇風	清子
名水や旨み引出す豆腐懷石	幸
歩道の葉踏みて音一つ秋近し	真三
朝鳥のてんでに鳴くや梅雨晴間	秀一
人間が発火しさうな暑さかな	明美
小雨降る薔薇の通りをひとりゆく	真三
夏大樹富岡歴史の生証人	幸
絵手紙に団扇の風を送られし	ツル子
夏燕巢をかまへたる書庫の端	真三
高階にひとり楽しむ遠花火	清子
作業衣を夜濯するやあした晴れ	ヤエ子
夏風に崖の樹ゆれて街はるか	真三
満水のダム山脈の郭公鳴く	幸
駆け上がる二階に見えぬ遠花火	ツル子
洋装の老女住みをり葭障子	ヤエ子
紫外線注意情報梅雨明けぬ	友子
花莫菫を抱へおちこち蔭求め	ヤエ子
夜もすがらはかなき匂ふ月下美人	ツル子
冷房のききて連弾コンサート	真三
(不在投句 古野明美、原田清子、平野邦子、 岩崎真三)	

「事務局よりお知らせ」

- ① 八月の定例会会はお休みです。
- ② 九月の定例会会は次のとおりです。
 - ・日時 九月二十二日(日) 午後一時三十分
 - ・場所 旭区民文化センター・サンハート、
(相鉄線二俣川駅ライフ五階)